

自己肯定感・自己有用感を育む指導の在り方 —地域の人々との体験的学習を通して—

碧南市立新川中学校教諭 糟 有加里

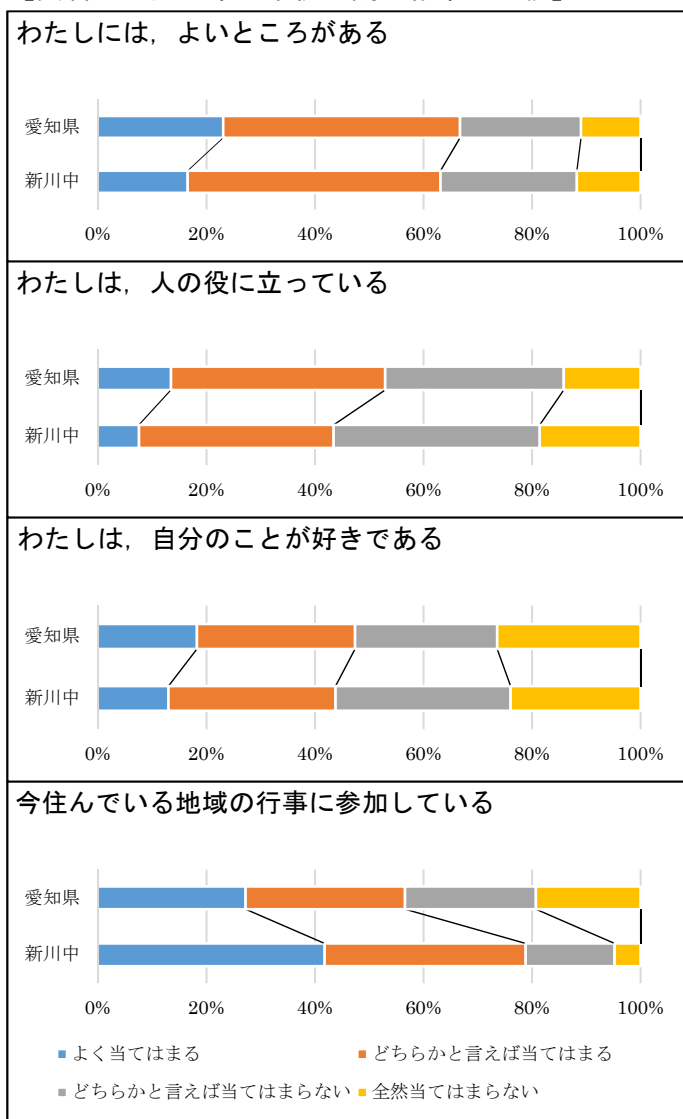
1 はじめに

碧南市は愛知県の南西部に位置し、碧南市の北部に新川地区はある。新川地区は更に七つの小地区に分かれ、各地区に神社があり、それぞれに祭礼などを行っている。新川地区の子どもたちは地区の祭礼において山車を引いたり、チャラボコに参加したりするなど、地域の活動に積極的に参加しており、小さい頃から地区の人々と一緒に活動してきている。本校には活発で積極的な生徒が多く、委員会活動などの校内の活動に意欲的に取り組むことができ、ボランティア活動に参加する生徒も多い。地域からは、挨拶がよくできる生徒として評判である。

昨年度行ったセンターによる実態調査について、愛知県全体の結果と本校結果を比較してみた(資料1)。すると、県全体に比べて自己肯定感や自己有用感が低いことや、地域の行事に参加している割合が高いことが読み取れた。

このような実態から、地域とのつながりの強さを生かして、生徒の自己肯定感や自己有用感を高めることが有効ではないかと考えた。そこで、本校の特徴である地域の行事やボランティア活動などの体験活動を通して、地域からその活動を認められることで、自己肯定感や自己有用感を高める生徒の育成を目指し、本実践を行った。

【資料1 愛知県と本校の調査結果の比較】



2 手だて

(1) 生徒会を中心とした地域での体験活動の場の設定

- ア 地区の清掃活動「クリーン大作戦」への参加
- イ 碧南市の夏祭り「元気ッスへきなん」への参加

(2) 地域の人とふれあう場の設定

3 実践の内容

(1) 生徒会を中心とした地域での体験活動の場の設定

ア 地区の清掃活動「クリーン大作戦」への参加

(ア) 活動前の生徒会執行部による呼びかけ

本校のある新川地区では、新川公民館の自主事業として地区の清掃活動を毎年行っている。小学校、中学校、幼稚園、グラウンドの周り及び線路沿いの各箇所に分かれ、ごみ拾いや除草作業を行う。これには地域の人々や小中学校の教員、保護者も参加している。新川中学校生徒会も長年にわたり協力しており、当日は生徒会執行部が地域の方とともに運営に携わっている。

参加者を募集する際には、生徒議会や給食時の校内放送を使って、生徒会執行部が呼びかけを行った。「お世話になっている地域のために、みんなで一緒に掃除しましょう」「自分たちが暮らす町を、自分たちできれいにしよう」「たくさんの参加を待っています」など、それぞれの生徒が「クリーン大作戦」に対しての思いを全校に話し、募集を募った。また、学級で参加者の集約をする際には、友人と声をかけ合って一緒に参加を申し込む生徒も多く見られた。

(イ) 活動中の生徒の様子と地域の人々との関わり

「クリーン大作戦」当日、新川公民館には新川中の生徒272名とその保護者、小学生や地域の人々も集まった。「みんなで力を合わせて、お世話になっている新川地区をきれいにしましょう！」という生徒会執行部の元気な呼びかけで、清掃活動が始まった。事後に、生徒会執行部の生徒たちは、「参加している人のやる気を起こしたい、地域の人に新中生がんばっているなあと思ってほしい、という気持ちで声をかけた」と話していた。

参加した生徒の4分の1程度の生徒は、バレー部やソフトテニス部、サッカー部など、部活動の一環として参加していた。地域の人に「あっちが大変そうだから手伝ってあげて」「この草を集めてほしい」などと声をかけられると、皆それぞれが快くそれに応えて行動し、清掃活動に取り組んでいた。刈った草でいっぱいになったゴミ袋を運んでいる生徒たちは大変そうだったが、表情は明るく、笑顔が溢れていた。ふだん校内ではあまり見られない生徒の姿を見ることができた。

(ウ) 活動後の生徒の様子

資料2は、活動後の生徒の感想である。

【資料2 活動後の生徒の感想】

- ・そうじする前とそうじした後を比べるととってもキレイになって、達成感がすごくありました。うれしかったです。
- ・めんどくさかったけれど、たくさんの草などがなくなってきれいになり、すっきりした。がんばったなと思いました。
- ・暑かったし虫がいていやだったけれど、みんなと地域に貢献できてよかった。
- ・きれいになってすっきりしたし、地域の方と話せて楽しかった。



<活動前に呼びかけを行う生徒会執行部>

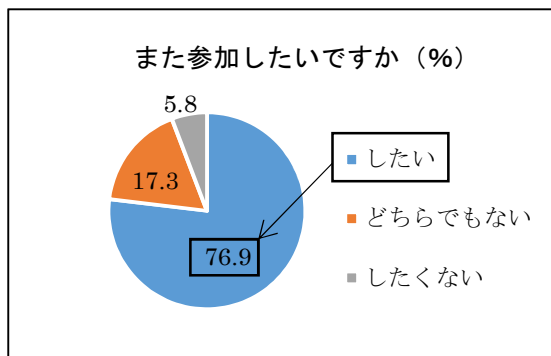


<地域の人とごみや草を集める様子>

事後アンケートの感想では、参加する前はめんどうだという気持ちだったが、活動後は達成感でいっぱいだったという意見や、地域の人々のために役立つことがうれしかったという意見が多かった。

さらに、活動後に生徒にアンケート調査を行った。「また参加したいですか」という質問に対しては、多くの生徒が参加したいと答えた(資料3)。また、その理由についても書かせたところ、資料4のようであった。

【資料3 活動後の生徒へのアンケート】



【資料4 活動後の生徒へのアンケート(記述)】

- ・きれいにするのは好きだし、先生に「ありがとう」と言われてうれしかったから。
- ・友達に誘われて行ったけれど、公民館の人に感謝されてうれしかったので、喜んでもらえるならもう1回やってもいいと思ったから。
- ・面倒だと思うけれど、だれかのためになにかできると気持ちがいいから。
- ・また参加して地域に貢献したいから。
- ・自分たちが生活している新川地区のそうじは協力していきたいと思うから。
- ・地域の方に助けられている分、地域の方のために働きたいと思うから。

資料4の記述から、初めは乗り気でなかった生徒も実際に活動してみることで、地域の人や教員など、周りの大人から褒められたり、感謝されたり、認められたりすることを嬉しいと感じたり、誰かのために何かをすることや、人のために役立つことができることを気持ちがいいと感じたりしている。さらに、生徒の言葉から地域という言葉が多く聞かれ、この活動を通して、地域の方々とふれあい、そのよさを実感し、地域に貢献したいという気持ちを高めたと感じている。

これらのことから、「クリーン大作戦」を通して、地域の人々との直接的な関わりをもったことは、生徒たちが自分が地域のために役に立ったと実感し、自己有用感の向上に有効であったと考える。

イ 碧南市の夏祭り「元気ッスへきなん」への参加

(ア) 活動前の生徒会執行部による呼びかけ

元気ッスへきなんは、碧南市で毎年行われる市主催の夏祭りである。市役所や文化会館の駐車場には、地元の商店街のブースや露店が並び、ステージでは市民が和太鼓やダンスを披露する。メインとなるのは「総踊り」で、オリジナルの踊りを市民がグループを作り、市役所前の通りで披露する。

参加者募集の際には、給食時の校内放送を使って、生徒会執行部から参加の呼びかけを行った。また、当日は体育祭の縦割りのグループに分かれて参加をするため、自分の学級と一緒にの団になった後輩たちに呼びかけをする三年生の姿もあった。

さらに、事前に生徒会執行部が舞台に上がり、全校生徒に踊りの見本を披露するなど、生徒会執行部が中心となり、生徒たちによる練習会を夏休みに行った。



〈練習会を進行する生徒会執行部〉

執行部の生徒は、事前に参加する生徒の気分を盛り上げて、元気よく踊ってもらえるようにするためにはどうしたらよいかを考えた。そして練習会当日は、執行部の生徒たちが自ら大きな声を出し、全校生徒の見本となるよう努力していた。また、体育祭で団長や応援リーダーとなる生徒に個別に声をかけ、元気よく踊ることのできる生徒が増えるよう、協力を仰ぐなどの工夫もしていた。練習会が進んでいくうちに、元気よく踊ることができる生徒が増え、生徒会執行部の生徒たちは安心すると同時に表情が和らぎ、心から楽しみながら練習ができたようだった。

(イ) 活動中の生徒の様子と地域の人々との関わり

当日は、250人ほどの生徒とその保護者、教員が一つのグループとなって参加した。体育祭の縦割りのグループごとに並び、三年生を先頭に踊りを披露した。猛暑の中、生徒たちは汗を流しながら一生懸命踊っていた。総踊りに参加している市民や沿道にいる観客に、「すごいね」「がんばって!」と声を掛けられる生徒の姿もあった。また、市の職員からも「新中生は元気で目立っているね」などと声を掛けられていた。友人に誘われて参加した、ふだん大人しく目立たない生徒も、大きな声を出しながら元気よく踊っていたのが印象的であった。また、祭りを盛り上げるため、三年生が後輩の様子を見て、励ましの言葉をかけたり、近くに寄って一緒に踊ったりするなど、生徒同士の関わりも多く見られた。

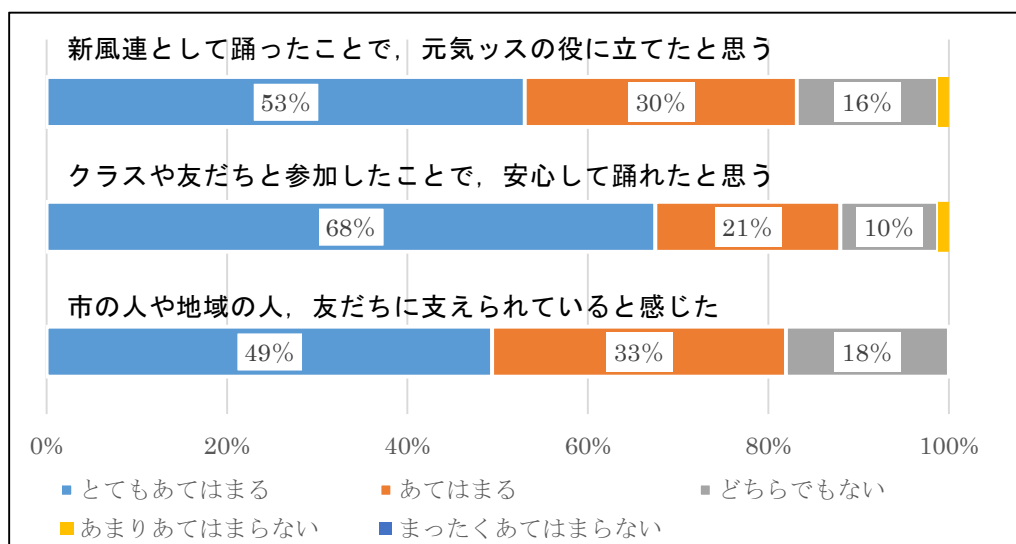


〈総踊りの様子〉

(ウ) 活動後の生徒の様子

事後にアンケートを行ったところ、どの質問についても肯定的な回答の割合が高かった(資料5)。このことから、生徒たちが元気ッスへきなんに参加したことで、「自分は地域の役に立った」と感じていることが、アンケートの結果から読み取ることができた。

【資料5 活動後の生徒へのアンケート】



また、多くの生徒が、家族や教員、市の職員に、参加後に「ありがとう」や「がんばったね」などの言葉をかけられたと答えており、「来年度もまた参加したいか」という質問に対しては、95%以上の生徒が参加したいと答えた。その理由としては、今年やってみて楽しかったからという意見が大半であったが、中には資料6に記載した意見もあり、周囲への配慮や、周囲からの配慮を実感していることが伺われた。

また、保護者の方に感想を伺ったところ、家で元気ッスへきなんのことを話題にしている生徒が多かったことを知り、このことが家庭の話題になり、家族からねぎらいの言葉をかけてもらう機会にもなったと感じた。

【資料6 活動後の生徒へのアンケート(記述)】

- ・元気ッスの役に立てるから
- ・わたしたちが踊ったことで喜んでくれた人がいたから

(2) 地域の人とふれあう場の設定

生徒が活動を通して味わう成就感に加え、「地域のため」という思いの中で活動をしたときに、地域の人々から「がんばったね」「ありがとう」「たすかりました」などと認め、励ます声をかけてもらえれば、更に自己肯定感や自己有用感を高められると考えた。そこで、生徒たちに地域の方と直接言葉を交わし、心の交流ができる機会を設けるようにした。

5月に行ったクリーン大作戦の際には、活動とは別に、主催する公民館の方や地域の方からお礼を言われたが、それは教員を介して生徒たちに伝えた。また、元気ッスへきなんの申し込みをした際にも、市の職員から教員へお礼を言われた。しかし、生徒たちが地域の方から直接お礼を言われれば、生徒たちはより成就感や満足感が味わえるだろうと考え、市の担当職員から生徒たちに直接言葉をかけていただく場面を設定した。

元気ッスへきなんの当日、市役所通りに整列した際、企画や運営をしている市役所地域協働課の担当職員が生徒会執行部の生徒に、「新中さんはいつも大人数で参加してくれて助かっています。今日も元気ッスを盛り上げてください。」と、お礼や励ましの言葉をかけてくれた。生徒会執行部の生徒は、市の職員と直接話すという貴重な機会に緊張した面持ちであったが、励ましの言葉をいただいたあとには満足気な表情で元気よく返事をしていた。

後に、生徒会執行部の生徒たちにそのときの気持ちを聞いたところ、「市の人に直接お礼を言われると違う」「緊張したけどうれしかった」と言っていた。また、「みんなにも聞いてもらいたい」とも言い、自分たちだけでなく、参加した生徒への配慮も感じた。元気ッスへきなんに参加した生徒からも、踊っている最中に沿道にいる観客から声をかけられたり、交通整理をしているスタッフに声をかけられたりしたことが嬉しかったという感想を聞いた。地域の人に活動を認められることで、8割以上の生徒が、市の人や地域の人、友だちに支えられていると感じることができた(資料5)。教員から声をかけられるときとは違う感情が生徒の中に生まれたのだと感じた。

4 実践のまとめ

本校では、全校生徒が参加できる体験活動が一年を通じて数回ある。各活動において生徒会執行部がリーダーとなって全校生徒に呼びかけを行っており、生徒は地域での体験活動を身近に感じている。しかし、それぞれの活動に取り組み始めたころは参加者も少なく、部活動単位など小規模の参加だった。次第に、生徒会執行部の呼びかけに応じて参加した生徒が、次の活動のときには友人や学級へ声をかけ、その輪が広がっていったという経緯がある。現在は、生徒会執行部が中心となって取り組む体験活動として認知され、非常に多くの生徒が参加する活動となっている。

今回の実践を通して、生徒たちが互いに声をかけあって活動したり、保護者や地域の人とも一緒に活動したりすることで、頼りにされ、感謝されることを経験した。つまり、生徒同士の活動に加え、地域の人々と活動したことによって、生徒たちが地域に必要とされていることを、それぞれの体験を通して実感したと考えられる。

さらに、生徒が自分の成長を実感し、自己肯定感や自己有用感の向上を促進するためには、生徒同士がお互いのよさを認め合ったり、教師と地域の人と一緒に振り返ったりする場を設定することや、生徒会執行部だけでなく、参加する全ての生徒が認め、励まされる機会を設けることなどができるとよかったのではないかと考える。今後、活動をよりよくしていく上での課題としたい。

5 おわりに

今回は3年生の生徒を中心に実践及び調査を行った。1,2年生での経験をもとに参加意欲も高く、活動のねらいも十分に理解できていたので、成果を得られたと思う。より成果を高めていくためには、これらの活動を現在の1,2年生にも広げ、中学校の3年間を見通した活動になるとよいと感じた。生徒の自己肯定感や自己有用感が高まり、豊かな人間性が育まれるよう、これらの活動を発展させていきたい。